

校長室より

令和6年9月2日(月)

「パリオリンピック」



7月24日から8月12日にかけて行われたパリオリンピック。各国の代表がメダルをかけた熱い戦いを繰り広げ、試合ごとに勝者の喜び、敗者の悔しさをたくさん見ることができました。

今回は、ある選手が試合後に語った言葉にとっても感銘を受けたので紹介します。

選手の名前は日本の四十住^{よそずみ}さくら選手。スケートボードの女子パークで東京オリンピックの金メダリスト。しかし、四十住選手はオリンピック女王として注目度が上がってからも「自分は金メダリストだと思っていない。」と日々進化するスケートボードに対して向上心を絶やさなかったそうです。

今回もメダル候補として期待を背負っての出場でしたが、予選4組中1組目の4位でした。1組目が終わった時点で、四十住選手は

「1本目は乗れたが、ちょっと80点台までいかなかった。(2、3本目で)もうちょっと上げた方がいいと思ったが、最後までいけず、ちょっと悔しい。」

「めっちゃ2連覇しようと思ってきたので、ワンツースリーの中にいたかったが、緊張もあった。とりあえず1本乗れて本当よかった。」

と振り返っています。

そして、残り3組の結果を待つ心境を「最後まであきらめずに。でも人の失敗は祈りたくないの。ちょっと変な気持ちになっちゃうんですけど、(決勝に)行けるように祈ります。」と続けています。2組終了時では5位、3組終了時では7位だったが、最終4組途中で9位となり予選通過圏外に転落し、彼女のオリンピックは終わりました。

この競技は十代の選手が台頭していますが、22歳の四十住選手が発した言葉に、私は自分の器の小ささに恥ずかしさを覚えました。私は部活動に長年携わってききましたが、大会では「人の失敗を願い、人の失敗を喜ぶ」自分がいました。

アスリートのコーチとして、そして人として、これからは「人の失敗を相手の立場にたって思いやり、自分の戒めとして受け入れる。」

今後の自分の指針としていこうと思いました。